

— 書 評 —

「南開大学と日本アーカイブス」を作る会編

『南開と日本——南開大学と日本の百年 アーカイブスDVD』

(東日本国際大学客員教授) 西園寺 一晃

南開大学は天津市にある総合大学で、北京大学、清華大学（北京）、復旦大学（上海）などと共に、その知名度、レベルの高さで、中国では知らない人はいない。また世界的にも中国の名門大学として名を馳せている。

その南開大学が2019年、創立100周年を迎えた。同大学創立100周年を記念し、大変興味深い本が出版された。それがこの「南開と日本——南開大学と日本の百年 アーカイブスDVD」だ。この本は企画から4年の歳月をかけて、出版にこぎつけた力作である。この本の製作には、南開大学に所縁のある中国と日本の大勢の現役学生、教員、OBが参画した。特に出版の原動力となったのは、南開大学で日本語人材の育成に尽力した日本人教員OBの方々である。DVD付きなのも嬉しい。

まずは南開大学の歴史と現状を簡単に紹介する必要がある。南開大学の歴史は、前身である私学の時代、抗日戦争の時代、中華人民共和国成立以降の3段階に分かれる。

1904年、南開大学の前身である「天津敬業学堂」が設立され、1906年、「天津南開学堂」に改称された。さらに1912年には「天津南開中学」に改称された。1915年には「天津南開中学大学部」が設けられ、1919年、「私立南開大学」が設立された。ここから正式に「南開大学」の歴史が始まった。創立時の学部は文、理、商のみで、学生数はわずか73人だった。

1937年、日本軍国主義侵略軍により、南開大学は爆撃を受け、北京大学、清華大学と共に長沙に移転、「長沙臨時大学」として教育を行った。1938年、雲南省昆明に再移転し、「国立西南聯合大学」と改称された。なお、南開経済研究所、南

開中学・高校は重慶に移転した。

1946年、天津に戻り「国立南開大学」となった。中華人民共和国成立後の1950年、正式名を「南開大学」として、今日に至っている。この間、1952年には工学部が分離し、「天津大学」となり、1958年には財経学部が独立し「天津財経学院」となった。また1993年には医学部が設置され、1995年には天津対外貿易学院を吸収合併した。

南開大学は、波乱に満ちた、長い歴史を誇る名門校だが、多くの有名人を輩出している。例えば中華人民共和国の名宰相周恩来（1919年入学）、1957年にノーベル物理学賞を得た楊振寧（1942年、西南聯合大学卒）、同じく1957年にノーベル物理学賞を得た李政道（1944年、西南聯合大学入学）らである。

現在の南開大学は、3つのキャンパスからなる。メインキャンパスの八里台校区周辺には天津大学、天津師範大学、天津医科大学などがあり、多くの店舗が集まる学生街がある。中に動物園のある水上公園も近くだ。大学の南には天津タワー（天塔）が聳える。また南開大学のOBであり、死してなお中国人民の敬愛を集める周恩来と、その妻鄧穎超を記念する「周恩来・鄧穎超記念館」もすぐ近くにある。

南開大学の学生は、2020年4月現在で約2万8500人、うち大学院生は約1万2000人である。教員は約3100人で、うち教授は860人。外国留学生数は約3100人で、うち日本人留学生は220人。学部は約20、研究所は10、附属の幼稚園、小・中学校を持ち、附属病院を有している。

中国には「211工程」と「985工程」という教育プロジェクトがある。「211工程」は1995年1月に制定されたもので、21世紀に向け、約100のレベルの高い大学に、政府が重点的に投資し、さらにレベルアップを図るものである。選ばれれば「211工程大学」となる。「985工程」は、1998年5月に制定されたもので、大学の研究活動を国際レベル

に高めるため、「211工程大学」の中から、更に選りすぐり、政府が最重点大学として特別投資を行う。選ばれた大学は「985工程大学」となる。第1期に34大学が選ばれ、第2期に5大学が追加された。南開大学はこの全てに入っている。

南開大学の特徴の1つは、早くから国際化を目指し、世界各国の大学・学術機構と、学術、人材交流を行ってきたことである。世界の100以上の国・地域の200余の大学、学術機構と提携している。日本の大学との関係も広く、深い。友好提携、学術交流を行っている大学は、愛知大学、早稲田大学、慶應義塾大学、立命館大学、中央大学、青山学院大学、北海道大学、一橋大学、東北学院大学、武蔵大学、國學院大學、山梨学院大学、名城大学、久留米大学、上智大学、専修大学などである。愛知大学とはパートナー大学として、共同で「愛知大学孔子学院」を運営している。

歴史的に「南開と日本の関係」と言えば、先ず頭に浮かぶのは周恩来だろう。周恩来は1898年に江蘇省で生まれた。中国の激動期である。清朝は長期にわたる封建制で腐敗し、人民は塗炭の苦しみに喘いでいた。その清朝を倒したのは孫文の辛亥革命であった。1911年、周恩来13歳の時である。翌1912年、清朝が崩壊し、中華民国が成立した。しかし、軍閥の群雄割拠は変わらず、中国は近代国家に脱皮出来なかった。そればかりか、中国は英国など列強の植民地争奪の対象となった。アジアで初めて近代国家に脱皮したのは、明治維新を経た日本であった。1913年、周恩来は南開中学に入学、厳しい社会の風に触れることになる。正義感に満ちた周恩来は、仲間と共に「反軍閥」の学生運動を始めるが、度重なる弾圧に挫折する。1917年、周恩来は南開中学を卒業すると、日本への留学を決意し、実行する。日本留学の目的は、中国が近代国家に生まれ変わるための答え探しであった。

日本では、河上肇の思想に大きな影響を受け、

河上の著作を読み、初めてマルクス主義に触れた。ところが周恩来が日本に期待し、留学した頃から、日本は富国強兵、軍国主義の道を歩みだし、中国に野心を露わにしていた。周恩来は、帰国を決意する。帰国の目的は、日本軍国主義の中国侵略と戦うためであった。周恩来は1919年4月、桜満開の時期に、神戸から船で帰国した。神戸に行く途中、京都の嵐山に立ち寄り、読んだ詩が「雨中嵐山」である。

帰国した周恩来は、南開大学文学部に入学するが、ちょうど抗日の「五・四」運動が巻き起こり、周恩来は天津で学生運動を組織し、指導した。その運動の中で、後に伴侶となる鄧穎超と出会う。この頃の周恩来は、日本でマルクス主義には触れてはいたが、共産主義者にはまだなっていない。若い、正義感に満ちた愛国青年であった。

余談だが、筆者が初めて周恩来に会ったのは1958年である。日中国交正常化の下準備のため、北京に移住する両親に連れられての北京行きであったが、ある日、周恩来夫妻に自宅に招かれ、歓迎の昼食をご馳走になった。当時私は中学3年生であった。周恩来は日本で、相当嫌な思いをしたはずである。特高に付け回され、留学生仲間の集会、会議すら出来ない状況であった。その後の抗日戦争においても、多くの同志が日本侵略者によって殺されたのだ。私は、周恩来は日本が嫌いだと思っていた。ところが会って、話を聞いて驚いた。日本に懐かしみの情を持ち、日本への愛情すら感じたのである。周恩来は「列強の植民地にならず、近代国家に脱皮した日本からは、学ぶところが多くある」と言い、「日本の文化は素晴らしい」とも言った。そして、「私はとても貧しかった。食事もろくに出来ない時があった。そんな時、下宿のおばさんが家に招いてくれて、ご馳走してくれた。あの時の豆腐がとても美味しかった」と目を細めた。

周恩来は、中華人民共和国成立後、死去するま

で政務院・國務院総理（首相）を務めた。内政はもとより、外交全般の総責任者であった。生涯、周恩来は多くの外国人と会見したが、一番多かったのは日本人だという。周恩来の会った日本人は、政財界のリーダー、文化界の有名人だけではない。時には青年、学生、労働者、農民、芸能人、スポーツ選手など一般庶民にも会い、親しく交流した。

さて、前語り部分が長くなったが、この本の紹介に移ることにする。冒頭で「大変興味深い本が出版された」と書いたが、「興味深い」というのは、この本が南開大学創立100周年の、単なる記念誌ではないという事だ。この本には、「歴史」が詰まっている。それは単に南開大学と日本との関係史だけではなく、中国と日本との関係史でもある。

南開大学の創始者であり、30年にわたり学長を務めた張伯苓の孫に当たる張元龍（天津市中華基督教青年会YMCA理事長、元全国政治協商會議委員）のインタビュー「祖父・張伯苓を語る」が大変面白い（インタビュアーは池上正治・元南開大学日本語教師）。張元龍のインタビュー内容は、字数の関係で詳しく紹介することが出来ないのは残念だが、日本占領時代前後の南開大学、天津、中国を知る上で大変貴重だ。是非熟読して欲しい。

南開大学を知る日本人でも、日本軍が南開大学を意図的に爆撃し、8年に渡り占領した事は知らないだろう。南開大学は抗日運動の拠点であった。張伯苓学長も、抗日の学生たちを陰から支援していたので、日本の特務機関に監視されていたという。1937年7月28日、日本陸軍の次官だった梅津美治郎は、記者会見で、一兩日中に日本軍は南開大学を空爆すると公言した。翌日、南開大学は日本軍の激しい空爆を受け、破壊され、占領された。大学が所有していた多くの貴重な書籍や資料、文物は日本軍によって持ち去られた。驚くべき事に、その略奪された書籍や文物は、未だに南開大学に返還されていないという事だ。張元龍らは、日中国交正常化後、これらの返還を求める訴訟を起こ

すことを考えたが、諸般の事情を考慮し、訴訟を放棄した。しかし「未来志向のアイデア」を提起したという。それは「中国と日本で、各界の有識人士を包括した組織を作り、南開大学が（日本軍に）空爆された事実を認定し、南開の貴重な書籍や文物が大量に日本にあることを肯定した上で、教育基金のようなものを作ること」だという。このような建設的な提案がありながら実現しないのは、日本側の「歴史認識」に大きな問題があることは明白であり、日本の恥でもある。張元龍は、当時の中国、当時の日中関係を理解する一助として、3冊の本を読むことを勧めている。松本重治著『上海時代——ジャーナリストの回想録』、傅恩齡著『東北地理教本』、『張伯苓全集』だ。「上海時代」は有名で、年配の中国研究者なら必読の書だった。若い研究者で、未読の方はぜひ読むことを勧める。

張元龍のインタビューを含め、この本には3本のインタビューが掲載されている。「嚴修の『東游日記』や嚴家の事」（嚴慈愷・インタビュアー池上正治）、「祖父・張伯苓の思い出を語る」（張元良・インタビュアー池上正治・張国璐・李振溪）。嚴修（1860年－1929年）は常に張伯苓に寄り添い、創立時から主に経済面で張伯苓を支援した。どれも非常に濃い内容だが、字数の関係で紹介できないのが残念だ。

日本軍の南開大学爆撃と言えば、日本占領下、南開大学内に「天津日本中学校」があったのは、ほとんど知られていない。この本には同中学校5期生の八木哲郎氏、6期生の若松晃、近藤久義両氏の鼎談「南開大学にあった天津日本中学校のこと」が載っている。これも大変興味深い。同中学は、天津大学の「思源堂」を校舎としていた。日本軍は南開大学を爆撃し、ほぼ破壊しつくしたが、唯一残ったのは思源堂だった。日本軍はこの思源堂を占領（接收）し、ここに中学校を設置したのである。つまり天津日本中学校は、日本侵略軍に

よる野蛮な大学爆撃の結果、出来た侵略の産物であった。にもかかわらず、日本中学校関係者には、日本の蛮行を恥じていた人もいた。その1人が初代校長の丸山英一である。丸山は、事あるごとに「無断で南開大学を使用させてもらって申し訳ない。お詫びしなければ」と言っていたそう。この丸山の気持ちが実現したのは、1999年、南開大学創立80周年の際で、日本中学校の卒業生有志が祝賀の寄付金を集め、代表が南開大学に届けている。また卒業生の多くは、その後の日中学術交流に貢献し、日本と南開大学の友好交流の礎を築いた。日本中学校での、授業、生活、学寮などについては、3人の卒業生が詳しく述べている。

この本には、多くの南開大学関係者が寄稿している。内容は自分と南開大学の関わり、あるいは南開大学の知られざる一面などである。その中には、主に1980年以降南開大学に留学した日本人留学生、南開大学で日本語の人材育成に貢献した日本人教師、南開大学で日本語を学んだ中国人学生、南開大学から日本に留学した中国留学生、南開大学OBで、現在日本に居住している中国人、華人など多彩だ。それぞれが身を以て体験した「南開」及び「南開と日本」をリアルに書き綴っている。

この本を読んでつくづく思う事は、「南開人」の度量の大きさ、懐の深さである。大学を狙い撃ちした、日本軍の爆撃という歴史的蛮行があるにもかかわらず、日本との学術、友好交流を重視する南開大学、多くの日本人留学生を温かく迎え入れる中国人教師と学生。日本人留学生、日本人教師及びOBもそれに応え、南開と日本、中国と日本の友好交流の一翼を担っている。これからも多くの日本の若者が南開大学に留学して欲しい。また多くの南開大学の学生が日本に交換留学、研究留学して欲しいと思う。

最後になったが、南開大学曹雪濤学長の、非常に格調の高い序文「南開の新たな百年にさらなる世界的視野を」は、今後の南開大学の発展方向を

示している。

南開大学の更なる飛躍と、日本との友好関係の発展を祈る。

(2019年9月刊, 295ページ, 非売品)

付；

「南開と日本——南開大学と日本の百年 アーカイブスDVD」

「南开与日本——南开与日本百年交流档案DVD」